

# 感想

今年度の活動を終え、参加メンバーやファシリテーター、サポーターからの感想や思いを一部紹介いたします！

## 1. 参加メンバー

参加する前は、不安な事がたくさんありました。

自分は人前で話すのが苦手だからです。参加して、自分の苦手を克服できて、他校の事が知れて、新しい人とふれ合う事が出来たら良いなと思っていました。

参加したら、思っていたこと全て達成できました。

もちろん最初は知らない人ばかりで凄く緊張しました。ですが、レクリエーションを通して緊張が少しほぐれ、さらに話し合いを進めていくうちに緊張はなくなり、笑顔になっていきました。

また、自分の意見を言ったときにメンバーの人やサポーターの人はどんなことでも納得してくれたり、共感してくれたりして、「発言」という言葉のイメージが変わりました。ハイティーン会議に出会ったのは奇跡だと思います。自分を少し変えることができました。たくさんの人とふれ合う大切さを学びました。数えきれないほどの何かを教えてくれたハイティーン会議、サポーターの方々、共に参加したみんな、ファシリテーターの方、に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。自分が成長できて嬉しいです。

コロナ禍という中でも対面で同世代の方達の意見を聞くことができたのはこれからの生活の中でも良い学びとなった。また、ひとつのことを深く掘り下げて考えていくことはなかなかしないので貴重な経験となった。





毎回新しい発見があつて行くのが楽しみでした！  
ジェンダーという答えのない問題の解決策を考えることは非常に難しかったです、同じチームのみんなとプレゼンすることができて良かったです。

とても楽しかった。最初はあまり発言ができる状況ではなかったけど、回数を重ねるたびに絆が深まり、話し合いができるようになってとても嬉しく思った。

今年初めて参加してとても緊張したが、アイスブレイクなどを通して緊張がとけ、本音を言える場所だったのがとてもいいと感じた。

自分の学生生活で思い出に残る経験でした。他の参加者の人たちから、自分の知らないことや考え方を学ぶことができ、とても貴重な時間でした。機会を与えてくださった方々に感謝したいです。



様々な人の考えが聞けたことがとてもよかった。  
また、自分の知らないことを聞けたりと、学ぶことができた。  
一方で、もう少し話し合いたかった。

自分の考えを率直に話し合える場ということで、とても楽しかったし、今後の自分たちの未来を考えるきっかけとなり、非常に貴重な経験になったと感じた。

いろいろな人と話し合いしたり  
新しい友達もできたりしました。



普段の生活から疑問を見つけ、他校の方々と交流し、自分たちなりの考えを出すだけでなく、大人の方々の意見も聞くという貴重な体験をすることができました。また、自分のグループの話し合いの中で学べただけでなく、他のグループの方々の発表を聞いたことで多くのことを学びました。今回のハイティーン会議での経験を活かして、自分ができることは小さなことかもしれないけれど、行動に移していきたいです。短い期間ではありましたが、本当にありがとうございました。



今まで自分の中にはなかった意見を知ることができたり新しい発見があったりと、普段はできないような形で自分の生きる上での視野を広げることができるのが良かったです。

普段過ごしているうちではできないような経験ができて、とても楽しかったです。非日常的な環境で話し合ったことでとても良い刺激になりました。



他校の生徒やサポーターの方々と楽しく話し合いができて凄く楽しかったからです！

## 2. ファシリテーター

大阪教育大学 総合教育系教育協働学科 特任講師 松山鮎子 先生

### 「対話を生む場づくりの大切さーハイティーン会議の感想に代えて」

昨年の秋にハイティーン会議の報告会を終えてから、早4ヶ月ほどが経ちました。この間、一進一退の状況が続くコロナ禍に加え、ロシアのウクライナ侵攻という、数ヶ月前には想像すらしていなかった事態が生じ、現在の世界はあたかも19世紀に戻ったかのような状況下に置かれています。

2年前、コロナの影響で主に海外で生産されていたマスクの入手が困難になり、社会的な混乱が生じたことは記憶に新しいと思います。今回の事態においても、すでに国内の大手電力会社は、ロシアから購入している液化天然ガスなどの調達が先々難しくなり、燃料価格が上昇することを懸念し、新規契約を見送るなどの対応を迫られていると聞いています。また、このままいくとガソリン代や電気料金の値上げの影響が、私たちの生活を直撃するとも予測されています。さらにこうした状況が、現在日本が直面している貧困の問題をいっそう深刻化させるリスクもあり、さまざまなレベルで世界が繋がりが合っている現代社会にあって、地理的には遠いところで起きている戦争でも、私たちはもはや傍観者ではいられないのだと日々痛感させられています。『サピエンス全史』の著者であるユヴァル・ノア・ハラリ氏が、イギリスのガーディアン紙に寄稿した文章のなかで、「ウクライナでの戦争は、世界全体の未来を左右するだろう。もし圧政と侵略が勝利するのを許したら、誰もがその報いを受けることになる。ただ傍観しているだけでは意味がない。今や立ち上がり、行動を起こす時なのだ」と訴えたように、一人ひとりが、この社会で起きている出来事を自分ごととして受け止め、考え、行動できるかどうか問われているのだと思います。

ところで、ロシアが侵攻を始めて以来、麻布にあるウクライナ大使館へ募金や献花に訪れる人が絶えず、中にはお年玉を寄付する中学生や、ウクライナ国民への励ましの手紙を届ける小学生などもいるそうです。周囲の大人から何か助言があったのだとしても、遠い異国の地で困難に見舞われている人たちへ思いを馳せ、自分なりの行動を起こせる子どもたちがいるというのは素晴らしいことだと感じます。この話に限らず、これまで4年間ハイティーン会議に関わってきて感じるのは、子どもたちは、大人が想像する以上に社会で起きているさまざまな問題を真剣に受け止め、考えているということです。

たとえば、今年度のハイティーン会議のテーマは、「学校1:校則」(校則の必要性和その変え方)、「学校2:生徒らしさ」(校則の基になる「生徒らしさ」とは)、「ジェンダー」(マイノリティの人たちにとって暮らしやすい社会とは)、「環境問題」(地球温暖化への対応)、「AI」(AIと人間との共生のあり方)の5つでした。これらのうち学校の規則のあり方に関連する「校則」「生徒らしさ」は、「ブラック校則」の問題が社会的に注目を集めているように、ここ数年ハイティーン会議でもたびたび話題にのぼる、中高生にとって身近で関心の高いテーマの一つです。その他の3つは、いずれも社会の持続可能性の問題に関わっており、私たち大人も簡単には答えを出せない、しかし考えて



いかねばならない重要なテーマだといえます。中高生メンバーは、これらのテーマについて具体的な問いをたて、ワークショップや取材の場などで話し合いを重ね、自分たちなりの考えをまとめてくれ、その成果が本報告書にまとめられています。

また、別の機会ではありますが、ハイティーン会議のメンバーも数名参加してくれた、「気候変動」をテーマに全国の中高生と豊田中央研究所の技術者の方々が意見交換をするオンラインセミナーでは、たとえば、「環境問題や気候変動のような、最終的には関係するけど、すぐに自分の生活に影響がなさそうな問題」へより多くの人に関心を持てるようになるにはどうすればいいのかといった、本質的かつ対応が難しい疑問を中学生が出してくれました。こんなふうにしっかりと自分の考えをもてるのはごく一握りの「優秀な」子どもたちなのではと思われるかもしれませんが、今社会で起きていることを自分ごととして受け止め、考え、行動しようとしている、あるいはすでに実践している中高生は、私の知る限りでも学校の偏差値のレベルを問わず、全国各地にいます。

ただ残念なのは、本来はこうした子どもたちの気持ちを受けとめ、簡単には答えの出せない社会の問題を一緒に考えていく立場にあるはずの大人の側が、ともすると彼らから出てきた意見を「子どもの考えたこと」と軽視し、「そんなことを考えたってしょうがない」と思考を停止させてしまう場面が多々あるということです。もちろん、大人は子どもに比べて人生経験が豊富であり、物事をより多角的に広い視野で考えられるという面はあると思います。ただ、これはハイティーン会議の報告会の大人の感想にもときどきみられるのですが、子どもたちの考えたことや提案を受けて、自分ならその問題をどう考えるか伝えずに、批評やダメ出ししかしないというのはあまり建設的でないと感じます。同じこの社会に生きる者として、中高生にとって上の世代である大人たちが、あるテーマについてどう考えるかを彼らは知りたいでしょうし、そうした対話的なやりとりが、もっといろいろな考え方を知りたい、自分でも行動したいという彼らの前向きな気持ちを後押しすることにもなるのではないのでしょうか。

ここでいう「対話」とはどのような営みなのかというと、たとえば、哲学者の鷲田清一は、今日のコミュニケーション能力は議論(debate)で勝つことと勘違いされているフシがあるが、コミュニケーション教育で教えるべきは、議論(debate)ではなく、対話(dialogue)だと指摘しています<sup>ii</sup>。二つの違いは、議論(debate)は勝つことが目的なので、最初と最後で自分の考えが変わってしまったら負けですが、対話(dialogue)は、そのプロセスで自分が変わっていなければ意味がなく、話せば話すほど、お互いの差異が細やかに



見えてくるものという点にあります。たとえ自分の意見が正しいと思っていたとしても、相手と対話を重ねることで、物事のさまざまな面が見えてきて、当初の考えがより豊かに変化していくことはあると思います。そうした自分の変化を楽しむこと、つまり、相手がいて、対話を重ねることができるからこそ、自分は常に新しいものへと変化していくことができるという感覚をもち、それを楽しみつつ、お互いにとってより良い新たな意見を模索していく、このプロセスの全体が「対話」なのだといえます。

先ほどは少し愚痴めいたことを書きましたが、ハイティーン会議そのものは、そうした対話的な議論を、子どもどうし、あるいは、大学生サポーターや行政の職員、地域の大人たちと子どもたち

との間に、さらには大人どうしの間に生み出すことを大切に考えてきた事業であると思います。何より私自身が、ファシリテーターという立場でこの場に関わって、中高生メンバーと対話を重ねるなかで気がつくことが多くあり、考えがより深まったと実感しています。

また、既述のオンラインセミナーでは、終了後にある中学生が追加で質問をしてくれ、それに対してゲストの大人たちが手紙形式でお返事をするという、その後の展開も生まれました。その大人たちのお返事に対する、中学生の返信の一部をここに紹介します。

「まずはこのようなセミナー、そして対話の場を用意していただいたことに改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございます。対話とは、自分の意見がより豊かに変化していくことを愉しむことである、という話を聞いて、今回のセミナー及び意見交流の本当の意味を見つけられたように感じます。私は意見交流をする際、自分の意見をぶつけるだけで、相手の考えには否定するような返答をしてしまうことがあり、どちらかかというディベート寄りになってしまいがちです。自分の意見・立場は持ちつつも、相手の視点になって考え、お互いに深め合える。そして、よりよい行動を起こす。そんな“対話”がより多くの人とできるよう、努力し続けていきます…中略…(環境問題への対応として:筆者注)『ルールで縛る』という方法の他に具体的な解決策が見出せなかった私に対して、こちらの気持ちをくみ取っていただき『対話』の意味・意義を提示していただきました。いただいた文面を読みすすめるうちに、自分の中で考えに変化が生まれ、深まっていったことを実感し、これが対話なのだと感じました。これからも、いろいろな人との対話を大切に、自分なりの環境問題への意識を持てるよう、努力していきます」。

中高生に向けた事業では、たとえば上に挙げた例のような子どもの率直な思いに、同じ社会に生きる当事者として、大人がどう応えていくかということが問われると思います。ハイティーン会議に関していえば、先に紹介したとおり今年度は5つのテーマに取り組みましたが、いずれも今回の話し合いの場だけで結論は出せませんでした。短い期間で、かつ答えを出すのが難しい問いに取り組んだのだから当然のことではありますが、だからこそ、中高生メンバーのみならず、この場に関わった大学生や大人たち、報告書を手にとってください方々を含む全員が、これらのテーマについて今後も対話を続け、考えていってくださることを願っています。私自身も引きつづき、子どもたちからの問いかけを自分ごととして受け止め、考え、行動していきます。

最後に、一緒に会議の場をつくってきた子どもたちやサポーター、スタッフの皆さま、取材や報告会を通じて関わってくださった皆さまへ、この場をかりて感謝申し上げます。

---

i ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳「2022年2月28日ガーディアン紙 プーチンは負けた—ウラジーミル・プーチンがすでにこの戦争に敗れた理由(原題:Why Vladimir Putin has already lost this war)記事全文」Web 河出、<https://web.kawade.co.jp/bungei/34777/>(2022年3月4日閲覧)。

ii 鷲田清一・山極寿一『都市と野生の思考』集英社インターナショナル、2017年。

### 3. サポーター

今までメンバーとしてハイティーン会議に参加してきましたが、今年度からスタッフという立場でハイティーン会議に参加するにあたり、自分の意見を出しすぎないように気をつけようと決めていました。また、私は人を引っ張ったり意見をまとめたりすることが得意ではないのでメンバーと同じ感覚を共有してメンバーが煮詰まって困った時に助けられるポジションにいることを心がけました。結果、楽しい雰囲気交流会を迎えることが出来、和気あいあいと活動を進められたことに安心しました。

メンバーのちょっとした発言をどのように掘ったら本当に疑問に思っていることや知りたいことに辿り着けるのかサポーターとして必死に考えるところが楽しいです。



今年度で6年目のハイティーン会議、そして2年目のサポーターでした。参加している中でやはり毎年感じるのは、メンバーの興味のある議題が現代で大人たちも直面しているかなり大きく深刻な問題であることが多いということです。そして、大人ですらもその議題についてあまり知識を持っていなかったり、ステレオタイプを持ち続けていたりする……そんな問題に解決策を出そうと奮闘すると、スケールが大きすぎるだとか現実味がないだとか言い出す人もいますよね。しかしかの小説家は言いました「人間が想像できることは実現できる」と。少ない回数ではありましたが、ワークショップがメンバーの皆さんにとって想像するきっかけになったら嬉しいなと思いつつ今年度も進んできました。コロナ禍でできた様々な制限に自分がまだ順応できていないことは悔やまれますが、会議で得た情報や知識、社会問題に対する疑問が日常のどこかで活かされることになったら幸いです。その時はふいに来るはずですので、もし経験したらぜひ来年度教えてくださいね。



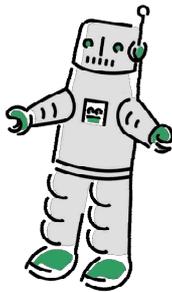
メンバーもサポーターも回を追うごとに成長していくので、見ていて楽しいです。





大人ですら回答に困るようなテーマについて、知識を蓄えつつ自分の考えを作り上げていく中高生の姿を見られる機会が新鮮で、楽しかった。

今年はサポーターとして3年目。ハイティーン会議に関わり始めて8年目であり、サポーターとしても先輩と呼べる立場になりました。そのため、参加できる限りは自分の担当しているグループ以外にも積極的に参加していました。これは毎年思うことですが、報告会が終了したときに、達成感を感じつつも今年度やりきったという十分な満足感は得られていません。もっとメンバーと会話をすればよかった、もっと自分に知識があったらと反省することばかりです。でも達成感と反省を合わせて今年のハイティーン会議に参加してよかったと思います。とても楽しかったです。メンバーの時代から、ハイティーン会議の達成感と楽しさをもっと多くの人に知ってほしいと思っていたので、今年度は様々な学校から多くのメンバーが参加してくれたことをとても嬉しく感じています。来年も続けてくれる人が多いと嬉しいと思います。



# チャレンジ・アクション

ハイティーン会議での活動を通じて得た考えや意見から発展して、学校や生徒会または個人で取り組んだ事例をご紹介します。

## 1. やって見た！

全国の学校では校則についてどのような対応がなされているのか調べてみた。校則について先生と少し話す機会を設けることができた。



学校の校則の改善に取り組んでいる。

ハイティーン会議を終えてから、今まで捨てていたコンタクトレンズのケースを、学校にあるエコボックスに入れることにしました。

自分の学校の校則について調べた。将来生徒会長になってより良い学校をつくりたいと思った。

現在、学校の生徒会活動で資源の回収箱を工夫するという取組を進めている。



◀ 投票箱のデザインにし、利用者が楽しみながら取り組めるよう工夫したそうです。

## 2. 考えてみた・意識してみた！

大学の副専攻などで学んでみたいなと思いました。また、ジェンダー問題について興味より湧き、ニュースなどで扱っていると見るようになりました。



周りの、ジェンダーへの配慮

▲ 日常生活の中での意識の変化が見られました

「らしさ」という言葉で人を決めつけないように心がけています。



私は生徒会役員なので、ハイティーン会議を通して学校の校則を変えることが出来たら一番良いかなあと 생각합니다。ただし、すぐにはできないと思うので簡単できそうなものから先生方と話し合いながら変えていきたいです。そして笑顔溢れる、楽しい学校にしていきたいです。

### 3. 参加してみた！

①令和3年11月13日(土)に四季の森公園で開催された「なかのエコフェア2021」において、環境問題グループが報告会で使用したパワーポイントが紹介されました。また、環境問題グループの提案に対し、各課からコメントもいただきました！



**ごみゼロ推進課から** 

「資源の回収ボックス」認知度アップへのご提案ありがとうございます。

回収ボックスの認知度アップ作戦につきましては、ハイティーン会議の皆さんのご意見も参考にさせていただきながら、効果的なPR方法について検討させていただきます。

また、皆さんの提案を、ぜひ校内で実施してみてください。  
若い方々が資源回収やごみ減量について理解を深め、ふたんから「ごみを出さない・へらす」生活が広まっていくことを期待しています。

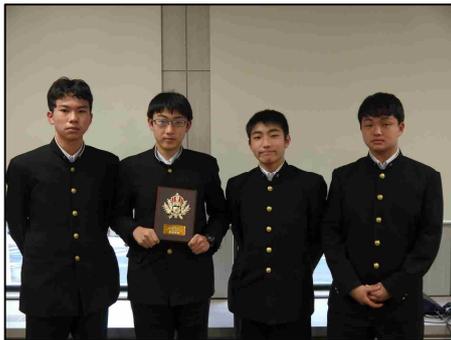
**環境課から** 

「なかのエコポイント」事業の学校単位での参加についてご提案ありがとうございます。

「なかのエコポイント」に学校単位で参加いただき、地球環境にやさしい配慮行動を中高生から促すことで、周囲の人の理解を深め意識や習慣を変えるきっかけとなり、持続可能な未来を引き継いでいくことを共に目指したいと考えます。

また、実践的な提案として、楽しくオトクに参加いただけるよう、交換賞品に図書カードなどを取り入れることも検討して参ります。

②環境省主催の「再エネサイエンスキッズフォーラム」に環境問題グループに所属する一部メンバーが参加し、生徒会での環境への取り組み等を発表したところ、最優秀賞を受賞しました！



中野区は、  
**中高生の皆さんの「チャレンジ・アクション」を応援します！**

皆さんがハイティーン会議を通して得た考えや気づきを、次のステップにつなげられるよう、毎年度工夫をしながら事業を進めていきます。

今後とも、みなさんのご参加をお待ちしています！



3中子育第2029号

発行 中野区子ども教育部

育成活動推進課 育成活動支援係

住所 〒164-0001 中野区中野 4-8-1

電話 03-3228-5648

FAX 03-3228-5659